

新宮神社

子授・安産・初宮詣・七五三・厄祓やくばらい・自動車安全祓・家祈祷やぎとう・地鎮祭・工事安全祈願祭・年忌祭・神葬祭

新宮神社の御祭神と祭礼日（平成27年予定）

- (1) 神社名 宗教法人・新宮神社
- (2) 鎮座地 高知県南国市十市五九三七番地
(境内の「十市保育園」の上です。入口同じ)
- (3) 祭神 天照皇大神あまてらす・伊邪那岐神いざなぎのかみ・健甕須佐之男神たけはやすさのおのかみ
- (4) 旧社格 郷社・十市地区（緑ヶ丘含む）の総鎮守。
- (5) 建物 本殿・流れ造 幣殿・拝殿・権現造 銅版屋根
- (6) 境内社 ①豊受神社とようけ（本殿東側）
②神母神社いげ 祭神・保食神（本殿西北側）
③天満宮 祭神・菅原道真公（本殿西南側）
④子育神社こやす 祭神・木花開耶姫神（第一鳥居前）
- (7) 祭礼日
歳旦祭・元旦朝8時から。

（ご由緒詳細や十市の不思議関連はHPへ）

- ・初詣・第18回「郷土を描く絵画展」1月1日～1月3日迄
- ・「お焚上げ祭」1月3日午後2時頃から。（古札のみ消却）
- ・どんど焼き（1月13日午前10時～十市メダカ池で執行）
- ・厄祓やくばらい 1月1日～節分～3月末が多い。ご予約を。
(家祈祷受付やぎとう 1～3月が多い、月日随時可)
- 節分祭 2月3日 10時～あとむ園児・追雛の神事・豆まき
- 建国記念の日 2月11日（紀元祭）10時～予定。
- 祈年祭（春祭）2月20日。

- ◆夏越の祓なごしい 6月30日暑い夏を無病息災で越す茅わぬけ祭。
- ・うらぼん会（中元祭）7月15日祖先の霊をまつる日。
- 十市の夏祭り・宵宮祭 7月19日（日）・あとむ園児の巫女舞・十市保育・あとむ幼稚園の太鼓＆踊り・奉納こども相撲、絵馬。
- ・献灯・第10回エコ・コンサート・雅楽の生演奏と豊栄舞

- 秋大祭（11月第一日曜日）11月1日オナバレ・流鏑馬・綱曳
- ・七五三詣り 11月12日（前後お好きな日にご予約可）
- 御立おみたて祭 11月11日7時～（旧9月末日）
- 新嘗にいなめ祭（秋祭）11月25日（火）午後2時から神事。
- 御迎おむかえ祭 12月10日7時～（旧10月末日）

- ・門松づくり 12月25日10時～十市保育園児・春峰会など
- 除夜祭（大晦日）12月31日大祓（開運厄除）・除夜祭・年越参
- (8) 神職 宮司・森國英夫

新宮神社 〒783-0085 高知県南国市十市5937
電話 088-865-5123 fax 865-5404

新宮神社の「由緒」(祭神・祭礼は裏面に)

新宮神社は、昔から「十市の総鎮守」として郷人とともにあります。創建・勧進はと聞かれますが、仏教のように新しく入ってきたものではなく、神社は日本民族固有の永い生活慣習の中で出来上がってきたものです。縦穴住居の遺構には神棚が存在しています。郷人の祖先が生活を始めたころからでしょう。文献上でわかるのは、日本の建国間もない頃の書物に「十市」が登場しています。日本の神社関係の基本規範が文書で制定されたのが奈良時代の西暦670年頃のことだといわれます。これが「延喜式」といわれるのは、延喜5年(905)に編纂刊行されたからです。今から約1100年くらい昔のことです。神職の衣装や祭祀・作法は、変わることなく、現在でも同じに執り行われております。

この中に「十市に坐ます神」が神饌の係りという最も祭祀に重要な部分をつかさどった事が記されています。「十市」と書いて「とおち」と読む地名は日本に二ヶ所あります。十市という地名は大変大事な食を司る神さまが坐す地だったのではないのでしょうか。但し、当時は神社名が違っていたかもしれません。白鳳時代の大地震で海底に没したとも言われ、十市の沖には漁師さん達から海底に井戸や瓦などが見えるとも聞いています。古代から総鎮守の神域は現在の池地区まででした。元々日本の祭祀(神社)にはいわゆる「おやしる」はなく清浄な地に岩とか、太い柱を立てたり、周囲に玉砂利をしくだけだった。十市の謎は、女衾神社名の「衾」の中に隠されていると密かに語り継がれてきました。が、その封印の奥に、閉ざされたままの美しい十市皇女(とおちのひめみこ)の伝承が！。十市皇女は父が大海人皇子、母が額田王。夫は大友皇子。壬申乱で夫に斬殺されたという。男と女の二つの神社、そこに秘められた古代ロマンを求めて大学生が研究テーマにと、ときおり訪れます。

古祭祀の様式が新宮神社には残されています。秋大祭当日の「お頭屋」の庭に、神輿の据え場所が作られます。齋竹の中の地表には、十市の海岸で漂着・潮こりをして早朝に採集された玉石が敷かれ、潮汲みされてきた桶からこの玉石に潮水がかけられます。これが三日間は続けられます。当日「樽は本殿に供えられる。

ご祭神は遠く波濤を越えてやってきたのでしょうか！。社殿周囲の山土を切り取る、拡張工事中に、地表に敷き詰められた玉石が出てきました。古代に玉石が山上に広く敷かれ、齋場が作られていた遺構かも。いや、航空測量写真に前方後円墳が2つ繋がっていることがはっきりと写っています。石室の跡もある。十市皇女の眠る地でしょうか。白鳳の大地震で十市の南部が海底に沈んだと言われています。新宮神社は崇りの神さまと言われ、畏れ故に高い信仰を集めています。500年を超えるヤマモモの雄花の巨樹など絶滅種の樹木が残されています。研究者はこの木々が優れた花粉を遠くまで

送り出してくれる素晴らしいところだと言う。子授け・安産・保育の神さまとして四国以遠からも多数の参拝者が訪れるのも、こんな大自然の営みを遠く離れた地の人々が感知できる、人間の不思議な能力には驚きです。生命のよみがえりの杜・次ぎの生命を育む神祕の杜を、次の世代へ大切に守って行かなければなりません。「土佐日記」の作者・紀貫之は、土佐を去るとき「大湊」で正月を過ごしました。豊富な食べ物の話題を詳細に記しているのも、航海安全を祈った神饌の神さまへの思い出だったのでしょうか。帰れない娘へのなごり、地名に残る皇女伝承が白波のように胸をあらったのでは……。七〇近い老人の脳裏に、和歌の入門書「土佐日記」の構想が芽生えていたのか、和歌の問答は大湊から始まります。十市皇女の母・額田王が歌人だったからでしょうか。現在も石土(いわつち)池周辺には当時の岬の守り神の祠が多数残っています。

棟札に残された最も古いものは、「文龜二年壬戌(1502)十一月十五日再興新宮三所権現社大檀那源重隆 大工新右衛門」とあったといわれます。源重隆とは十市栗山城主・細川重隆(初代細川武敏野守頼之から一〇代目)です。記されていた年の前年は全国的に干ばつ、飢饉に苦しんでいた頃です。ご神徳に報恩の再建だったのでしょう。下克上、戦国時代の始まりでした。和歌山県の新宮と繋がっています。熊野と同じく補陀落東門の伝承も伝わっています。

細川侯が十市に来たのは、長宗我部元親が統一を始める少し前です。田村の郷にいた細川氏の何らかの血を引く方だったのでしょうか。この少し前から熊野信仰のメッカになっていたようです。元親と細川家との関係で熊野系神社がさらに勧進されたようです。元親の重鎮となり四国制覇をしますが、関ヶ原で破れた土佐は山内侯の支配となります。新藩主から当神社への藩米や神田寄進など厚遇ぶりも記録されています。周囲にいくつかの神宮寺がありました。峰寺もその一つです。

現社殿は、文久二壬戌年十月(1862)に着工翌年完成。原形よりも大きく厳しく極彩色で壮麗に出来上がっております。彩色は昭和30年代までは残っていました。旧社殿は漆塗りだったようです。明治維新の6年前のことです。すでにこの時点で神仏分離かなり進んでいたのでしょうか。全国的な神仏分離の風は明治維新後ですから、そうとう早くから敬神尊皇思潮の波が十市では高かったことが窺えます。沿岸では大漁が続き、新しい産業の発展と文化が生まれていました。童馬の脱走もこの頃です。

松皮葺きで、鬼瓦には三つ葉樫の山内家紋が描かれていました。この家紋も大正十四年の銅板屋根化で外され、保存されていましたが、持ち去られてしまいました。新宮神社の神紋は、長宗我部時代の五三の桐と熊野系を示す三本足の赤い八咫鳥(やたからす)です。ここにも土佐の人々が旧国主への思慕の強さを示しているようです。明治維新の原動力はこんなところにも……。